ケーベル先生の「シエルツ」―― 明治31年の音楽会

関　根　和　江

はじめに

東京藝術大学音楽学部の第１回定期演奏会において、博士ケーベル先生はピアノ独奏曲を演奏し、その妙技を披露した。当日のプログラムには、「ピヤノ独奏　コイベル氏」とのみ記されている。本論では、この時演奏された曲の特定を試みる。

１．第１回定期演奏会

明治31年（1898）師走、日曜日の午後[1]、上野の奏楽堂において記念すべき一つの演奏会が開かれた。高等師範学校附属音楽学校[2]の秋季音楽会である。この日は、初冬の時雨模様から一転、晴天に恵まれ、大勢の聴衆が開演の１時間以上前から奏楽堂に集ったという[3]。会場は立錐の隙がなく、遅れて来校した人々は入場を断られるほどであった[4]と伝えられる。この演奏会が、東京藝術大学音楽学部の定期演奏会の嚆矢とされている[5]。

東京音楽学校の沿革を記した文書[6]にも、正式な記録として以下の記述が残されている。「十月廿八日授業ノ成績ヲ公表スル為メ春秋二季ニ音楽演奏会挙行ノコトヲ定ム」。単に学校の事業報告を紹介するもので、内容的には不十分との意見も見られたものの、音楽学校としての演奏会開催は、当時の音楽界で概ね好意的に受け容れられた。

「…（前略）次に亦余輩の喜ふへきことは昨冬に於ける音樂學校としての演奏會か上野にて行はれしことなり。渡邊主事[7]の報告するところによれは、音樂學校が音樂學校としての演奏會は此般を以て嚆矢となすと。又曰く、該演奏會（乃ち音樂學校としての演奏會）は第一回の事なり、且萬事不整頓なり、故に今般の演奏會は演奏會としてよりは寧ろ學校の今日進行しつゝある事業の報告を諸君に紹介するか如しと。余輩は其會か演奏會にせよ、報告會にせよ、何れなるや何如は問はさるなり、亦其演奏會の巧拙の批評を試むるに非さるなり。余輩か玆に賛成し、且音樂界の一現象として見る所の點は他なし、乃ち音樂學校としての音樂演奏會を起されたるの一事之なり。從來は如此擧なし、只卒業式に際しての演奏ありしのみなり。此擧を擴張して所謂音樂學校か學校としての演奏會を開き朝野の士

女に今音樂學校か爲しつゝある事業何如を紹介せられたるの一事は余輩大に渡邊主事矢田部校長の熱心を多とするもの。たとひ其演奏會の結果何如にせよ、音樂學校としての活動は實に此演奏會に起因すと稱して不可なかるへきを信して疑はざるなり、之れ余輩か賛成する所以の理由にしてまた他の幾多演奏會よりも多くの希望を此擧に繫くる所以なり。(後略)」[8]

この演奏会以後、音楽学校では、日頃の学習成果を公表することを目的に、通常は春と秋の年２回、定期演奏会が開催されることになった。そして定期演奏会は、100年以上の長きにわたり連綿と現在まで継続されているのである[9]。

さて、当日のプログラム（和文と欧文）は以下のとおりである[10]。

第一部

一、唱歌……生徒
　甲、此御山……モツアルト氏作曲
　　旗野十一郎氏作歌
　乙、別歌……ゼーリング氏作曲
　　鳥居忱氏作歌
二、ピヤノ独奏……研究生　瀧廉太郎
　　イタリヤニッシエス、コンセルト……バハ氏作曲
三、唱歌（女声三部）……生徒
　　友……ロトリ氏作曲
　　中村秋香氏作歌
四、ヴァイオリン、ピヤノ合奏……助教授　頼母木コマ
　　助教授　橘糸重
　　ソナタ（(ホ）短調）……モツアルト氏作曲
五、箏……助教授　遠山甲子
　　教員　今井新太郎
　　及生徒
　　六段調……八橋検校作曲
六、唱歌（単音）……生徒
　甲、君は神……ベートーベン氏作曲
　　東京音楽学校作歌
　乙、我国民……モツアルト氏作曲
　　大和田建樹氏作歌

第二部

一、ヴァイオリン合奏……職員、卒業生及生徒

ラーゴ……ヘンデル氏作曲

二、ピヤノ聯奏……三年生　神戸絢

研究生　内田菊

バレット……ルビンスタイン氏作曲

三、唱歌……生徒

甲、閑庭菊……ワインウルム氏作曲

鳥居忱氏作歌

乙、松浦佐用姫……ワインウルム氏作曲

武島又次郎氏作歌

四、ヴァイオリン聯奏……教授　幸田延

研究生　幸田幸

コンセルト……バハ氏作曲

五、ピヤノ独奏……コイベル氏

六、唱歌（管絃合奏）……職員、卒業生及生徒

天岩戸……ハイドン氏作曲

旗野十一郎氏作歌

Part Ⅰ.

1. Chorus:

a. “Ave Verum.” …… *Mozart*.

b. “Komm doch herein.” …… *Sering*.

Students of the Academy.

2. Piano Solo:

“Italienisches Concert.” …… *Bach*.

Mr. Taki.

3. Female chorus (*Three parts*):

“Forget me not.” …… *Rotoli*.

Students of the Academy.

4. Violin and Piano:

“Sonata” (*e moll*). …… *Mozart*.

Misses Tanomogi and Tachibana.

5. Koto:

"Rokudan." ····· *Yatsuhashi.*

Instructors and Students of the Academy.

6. Chorus:

a. "Die ehre Gottes aus der Natur." ····· *Beethoven.*

b. "Vaterlandsruf." ····· *Mozart.*

Students of the Academy.

Part II.

1. Violins:

"Largo." ····· *Händel.*

Instructors, Graduates and Students of the Academy.

2. Piano Duo:

"Ballet" aus der Oper Feramors. ····· *Rubinstein.*

Misses Kambe and Uchida.

3. Chorus:

a. "Toscanische Lieder" *No. 1.* ····· *Weinwurm.*

b. 〃 〃 *No. 6.* ····· *Weinwurm.*

Students of the Academy.

4. Violins:

"Doppelconcert." ····· *Bach.*

Misses N. Koda and K. Koda.

5. Piano Solo:

Dr. Koeber.

6. Chorus with Orchestra:

"God of Light" *from Seasons.* ····· *Haydn.*

Instructors, Graduates and Students of the Academy.

演奏会の模様は新聞紙上でも採り上げられ、概して好評を得たことが伺える。新聞の演奏会評[11]は、二日にわたって掲載され、各演目は以下のように評価されている。第1の合唱は美しく、第2の瀧廉太郎は益々進歩して十分の好楽手に恥じない演奏であり、第3の合唱は選曲に面白味があり、第4のデュオは曲目としては申し分ないが演奏に難ありと辛口で、第5の箏曲は10面の合奏が美観であり、また第6の合唱は「七八十人の大勢」で奇観を呈したとある。

続く第2部では、第7のヴァイオリン合奏は音楽学校の演奏会で馴染みのある曲で出来栄えも良く、第8の連弾は「神戸嬢が発達の著しくして能く此の舞曲の軽妙なる點を示された

り」と好意をもって受け容れられ、第 9 の合唱は難もなく、第10のデュオは遺憾のない名人芸を披露し、第11のピアノ独奏は当日の呼び物ケーベル氏のショパン「シエルツ」であり批評を要しないほどの妙技であった。最終の合唱は大がかりで、40人程の合唱にオーケストラとピアノが伴奏し、非常の上出来であり高音部も良く出て感嘆の他なく、堂々たる演奏は再演が待たれるものであった。東京音楽学校での日頃の勉励の成果が首尾良く世に問われた様子が伝わる批評であった。

「…（前略）かくて、此日の演奏ハ終りぬ、渡邊主事の用意も周到なりしなるべく演奏者諸氏の勉勵の程も推しはかられて、まことに未だ充分の設備も整はざりしと聞く第一回の演奏會としてハ至極の好成績なりき、只一點物足らぬ心地されしハ「オルガン」曲のあらざりし事なり、これも好樂器のなき爲ならんか、されバ「パイプオルガン」等の一日も早く此樂堂に備へられん事吾等の熱望する所なり。」[12]

2．ショパンのシエルツ

好評のうちに船出した第 1 回定期演奏会であったが、本論では、当日のプログラム中唯一、曲名と作曲者名が記されていない第 2 部 5 番目の、ケーベル博士によるピアノ独奏曲が何であったか、特定を試みたい。上記のように、他の演目は、曲名と作曲者名および演奏者名が記されているのだが、ケーベル博士については、ピアノを独奏するということのみアナウンスがあるだけで、他には何も記されていないのである。

まず、前掲の新聞記事に再度目を向けよう。注目すべき以下の記述が見られる。12月11日[13]に続く「楽石生」の記名による「音楽学校秋季演奏会」の評である。

「…（前略）第十一ハ當日の呼物ケーベル氏のピヤノ獨奏曲ハショパンの「シエルツ」なりき情熱に冨みし此作家の曲を當時我國に比するものなき妙手によりて奏されし事なれバ、我れ等が批評がましき事云ふべきかぎりにあらず。嘗てコンツキー氏の演奏を聽しが、氏の奏法ハ白玉を瑠璃盤上に轉すが如く、技術の調和美しく極めて優麗なりしが、ケーベル氏の演奏ハ寧ろ勇健塊奇の中に、閑雅の様を包含せり。（後略）」

この記事によれば、ピアノ独奏曲の作曲者は「ショパン」であり、曲は「シエルツ」である。

また、『天地人』にも興味深い演奏会評が掲載されている[14]。ケーベル博士によって、「ショペン」すなわちショパンの「シエルゾ」が演奏され、曲の力強く激しい曲想はまさにショパ

ンの特質を表し、演奏は批評に及ばない大家のものであったとの記述である。

「…（前略）ピアノの曲に於て第一に記すべきはフオン、ケーベル氏の奏せしショペン氏作のシェルゾなり。曲は實に有力激蕩にして感服すべく、作者の特質は此の如きものなり。ケーベル氏の如き大家を敢て批評する事は寧ろ僭妄の譏を免れざれば、予は其音樂會に於て演奏せしを此に謝するのみ。氏の教を受けし瀧廉太郎氏はバヒ氏作なるイタリエニツシエス、コンセルトを奏せしが、其奏法によりてケーベル氏の門人たるを推知すべく、其奏法の晴朗正確なるを賞すべきのみ。（後略）」

ショパンの「シエルツ」あるいは「シエルゾ」は、いかなる作品であろうか。

当時の音楽辞典[15]には、現今の「スケルツォScherzo」は、「シエルツ」と立項されており、イタリア語読みではなくドイツ語読みが流布していたことがわかる。

以上のことから、ケーベル博士の演奏したピアノ曲は、ショパンのスケルツォであることが判明した。

次に、ショパンの4曲あるスケルツォのうち、何番が演奏されたのかを絞り込む作業に移ろう。

楽石生による新聞記事には、彼が以前聴いたという「コンツキー氏」の演奏が比較に出されている。このピアニストの演奏した曲目にヒントがないであろうか。

コンツキ[16]については、上田敏が、「大音樂家男爵コンツキ氏」のタイトル[17]で、『文學界』に紹介している[18]。

「去月［6月］初め東洋漫遊の路我日本國へ立寄られし同男爵は去る廿二日帝國「ホテル」に於て披露大音樂會を催せられたり十數番の演奏中殊に喝采を得しは同氏作曲のSouvenir de “Foust” 及び最有名なるLe Reveil du Lionの二曲なりき…（中略）…細微絶妙なる技術によりて有名なり…同氏の彈法は驚べき程正格にして細微の術に巧なり（後略）」

また、一月ほど前の『東京日日新聞』にもコンツキの記事がある[19]。記名ではないが、「伊国代理公使の晩餐会」として、6月22日帝国ホテルにおいて、晩餐会が開かれ、「独逸音楽家コンスキー男爵及伊国音楽家ブラチェルニー氏及び…伊国貴女エステラ嬢のピヤノ」演奏が行われたことがわかる。

しかし、このどちらにも当日の演奏曲目について詳細は記されておらず、コンツキとの関連からショパン／スケルツォの情報を得ることはできなかった。

そこで、ケーベル博士自身が演奏した作品をたどりながら、特定作業を続行する。

音楽学校秋季音楽会の約 2 週間後、12月21日クリスマス週間の一夜、横浜のパブリックホールで行われた演奏会「HERR JUNKER'S CONCERT」で、ケーベル博士は、ショパンのスケルツォを演奏した。この時のプログラムが英字新聞に掲載されている[20]。

HERR JUNKER'S CONCERT.

The "Junker String-quartet" made its first appearance on Wednesday evening, before a fair audience in the Vestibule of the Public Hall. Chamber-concerts exhibit a specially delicate and refined branch of music; they appeal to the connoisseur, rather than to the flâneur: and it is no matter of surprise if the counter-attractions and festivities of Christmas-week had their effect upon the attendance.

With regard to the personnel of the quartet-party: —first comes the chief —Herr Junker—who shows to the best advantage when holding the violin. Then Mr. R. Schmid—an amateur who plays like an artist and adorns everything which he touches—was Herr Junker's worthy vis-à-vis: while the inner parts were efficiently filled by Messrs. H. A. Poole and F. Schmid, the Mendelssohn and Haydn selections being well within their powers. We, at all times, bow with reverence before the great talent of the Tokyo *virtuoso*—Professor von Koeber—and were delighted to see and hear him again in Yokohama.

The programme (besides the well-known specimens of Haydn and Mendelssohn) contained a goodly proportion of the modern romantic school: including examples of the sombre rhapsodical Chopin—the eccentric yet sometimes charming Grieg—the earnest Brahms, whose claims to rank as a classic are not universally recognised—and the distinguished violinist Ries, who knew how to write for his instrument. These numbers were all well done; Herren Junker and von Koeber shining preeminently in their respective solos, while the ensemble playing was distinctly good and effective. Altogether the instrumental work was a fine display of executive ability, and well merited the applause bestowed upon it. Mrs. James Walter and Mr. R. Seel contributed songs with marked success, and Professor Von Koeber increased our debt of gratitude by playing the accompaniments throughout the evening.

PROGRAMME.

PART Ⅰ.

1. —String Quartet in “D Major” ····· MENDELSSOHN.
   Herr JUNKER, Messrs. POOLE, F. SCHMID, and R. SCHMID.
2. —Aria ..... “Rinaldo” ····· HÄNDEL.
   Mrs. JAMES WALTER.
3. —Piano Solo ..... Scherzo ····· CHOPIN.
   Prof. VON KOEBER.
4. —Sonata in “F Major” for Piano and Violin ····· GRIEG.
   Prof. VON KOEBER and Herr JUNKER.

PART Ⅱ.

1. —Trio in “C Minor” ····· BRAHMS.
   Prof. VON KOEBER, Herr JUNKER, and Mr. R. SCHMID.
2. —Vocal Solo ..... “Da lieg ich unter den Bäumen” ····· MENDELSSOHN.
   Mr. R. SEEL.
3. —Violin Solo from the “G Major” Suite
   (a) “Andante Apassionate” ····· F. RIES.
   (b) “Perpetuo Mobile”
   Herr JUNKER.
4. —String Quartet
   (a) Variations from the “Kaiser Quartet” ····· HAYDN.
   (b) Andante Cantabile ····· TCHAIKOWSKY.
   (c) Canzonetta ····· MENDELSSOHN.

この記事には、何番のスケルツォかを特定できる情報がない。しかし、２つの演奏会がわずか２週間ばかりの短い間隔を空けて続けて開催されたこと、そして２つの演奏会で「スケルツォ」が演奏されていることを考えれば、ユンケルの演奏会で演奏されたスケルツォと秋季音楽会におけるスケルツォとは同じ曲であろうと容易に推測できる。このプログラムによって何番のスケルツォが演奏されたのかを特定するには至らないが、ケーベル博士の演奏を評した、“...sombre rhapsodical Chopin...” は、特定作業を進めるうえで記憶に留めるべきフレーズである。

3．ケーベル博士とショパン

次に、ケーベル博士のレパートリーを探った[21]。

レパートリーの内、ショパンは、以下のとおりである。演奏記録の残されている曲を、判明している範囲で、演奏の年代順に、曲名、日時、演奏会名、場所を記す。

表１．ケーベル博士のショパン・レパートリー

曲　　名	日　　時	演　奏　会　名	場　　所
小品	1883年秋	ハルトマンに披露[22]	ベルリン
エチュードとワルツ	1897.11.27	音楽会[23]	中央会堂
スケルツォ	1898.12. 4	東京音楽学校秋季音楽会	奏楽堂
スケルツォ	1898.12.21	ユンケルの演奏会[24]	パブリックホール
子守歌	1899. 5 .11	室内演奏会[25]	パブリックホール
エチュード	1903. 3 .21	カイゼル演奏会[26]	パブリックホール
プレリュードと小品	1903. 5 . 6	一番町教会慈善演奏会	一番町教会
アンプロンプチュ	1905. 2 .11	慈善大音楽会[27]	奏楽堂

なお、レパートリー全体から見れば、ショパンはあまり重要視されていないという印象を受ける。その理由は、ケーベル博士自身の発言により明らかである。

「…（前略）凡そ作曲家に具はつてゐる所の、音樂に特有なる天稟を最も的確に語るものは、其主題的製作と、動機を開展させる手腕とである、さうしてヴァリアティオーン程それを明白に示す形式は他にない。假令最も美しき旋律、最も氣分に富める音樂を案出する作曲家があらうとも、彼にして若しこの天稟を缺いて居るならば、彼は偉大なる作曲家の中に數へられてはならないと私は思ふ、―　例へばショパンの如きは。ピアノの專門家や、素人や又淑女達のこの寵兒をば作曲家として又詩人としてその三人の偉大なる同時代者、卽ちメンデルソーン、シゥーマン及びリストと並んで、否　―　屢見らるゝが如く　―　彼等の上に置くといふことは、全く許すべからざることである。彼の藝術の此等の大作曲家のそれに對する關係は、ほぼ客間の廣廣とした自然に於ける、蠟燭の火の太陽や月の光に於ける、長い絹衣裳のサラサラいふ音の風や浪のゴーゴーいふ響に於けるが如きものである。ショパンと共に成長し、そして彼を音樂の教師とした人、かういふ人は既に純眞な、偉大な藝術を　―　ピアニストとしてさへも　―　受け容れ得ぬほどに不純なる趣味や傾向によつて損はれて居るのである。　―　ベートーヴェン以前の古い大家や、『偉大なるＢ等』や、メンデルソーンやシゥーマの作品を、所謂『ショパン演奏家』が彈くのを聽くといふこと、これほど音樂家にとつて堪へ難い事はない。否、私は更に一歩を進めてかう主

張したい。ショパン自身の作品　―　私は唯研究の價値ある、最も優れたるもののみ、卽ち練習曲、スケルチ（Scherzi）バラーデン及び二三のノットゥルノースに就いて言ふのである　―　といへども、その眞に美しいのは、此等の曲が普通の聽者からは『冷やか』なとして喜ばれないやうに演奏さるゝ時に限るのである。　―　總じて藝術に於ける完全なるものに對して理解を有する者は極めて少數である、完全なるものは却つて魂のない、詩趣に乏しい、無味乾燥なるものと彼等には思はれる。貴孃にして、例へばショパンの『葬式進行曲』を惡しく、拙劣に、緩慢に、涙もろく彈けば彈くほど、それだけ多大の成功を貴孃は通俗の聽衆から期待して間違ない。ベートーヴェンの嬰ハ短調ソナータ（所謂『月光』ソナータ）、メンデルソーンの『春の歌』及びロンド・カプリチオーゾ（Rondo Capriccioso）シゥーマンの『ワルーム』其他の如き作品が若し常に藝術家によつてのみ演奏せられ來つたとしたならば、今日その負つて居るやうな大した人氣は決して贏ち得なかつたといふことは、私の保證し得るところである。此等の美しい作曲にその廣大なる名聲を得せしめたものは拙劣なる演奏であるが、しかしまた之がために、正しく演出さるゝ場合には、もはや聽衆に喜ばれないまでに其等の曲はその價値とその眞の美とを蔽はれた。（後略）」[28]

ケーベル博士のショパン観によれば、エチュード、スケルツォ、バラード、ノットゥルノの数曲のみが、研究（演奏）に値する優れた作品なのであり、しかもこれらの曲も、感情を込めず、冷ややかと思われるほど、淡々と演奏されなければならないのである。ケーベル博士によって演奏されたショパンのスケルツォが、「勇健塊奇の中に、閑雅の様を包含せり」[29]と評されたのも、博士の音楽観を知れば頷けよう。

4．ケーベル博士のショパン楽譜

ケーベル博士が演奏に用いた楽譜は現存するのであろうか。

ケーベル博士の蔵書は、死後遺言通り、二人の弟子すなわち、音楽関係が橘糸重[30]に、それ以外が久保勉[31]に贈与された。

久保の所有に関わる書籍1999冊は、昭和17年、東北帝国大学の当時図書館長だった小宮豊隆[32]の口利きで東北大学附属図書館に受け入れられ、爾来「ケーベル文庫」として公開、利用に供されている[33]。

一方、橘糸重が所蔵していた音楽関係の蔵書については、ケーベル作曲の自筆譜を含む音楽作品資料のみが、関東大震災罹災の折りに命からがら持ち出された[34]が、それ以外は文字通り灰燼と帰してしまったとのことである。

博士の蔵書から曲目を推定することは望めない状況にある。

個人蔵書からの資料探索が不可能であるとすれば、博士が嘱託講師としての職にあった東

京音楽学校の所蔵楽譜に、氏による使用の痕跡が見られないであろうか。

東京藝術大学附属図書館所蔵資料（旧東京音楽学校所蔵）に、ケーベル博士の演奏したスケルツォに関係のある、ショパンのピアノ曲楽譜は存在しないのであろうか。

旧東京音楽学校所蔵になるショパンのピアノ曲楽譜[35]は、附属図書館資料中に以下の 4 点[36]が確認される。

表 2 ．東京藝術大学附属図書館所蔵、東京音楽学校時代のショパンのピアノ曲

	資　料　名	受入日	受入番号	請求記号・備考
1	Chopin, Fryderyk Franciszek. Notturnos. Leipzig: Breitkopf & Härtel, [19--]	明治28年 4 月 1 日	205	C21/C549/7-4(P.Solo 40) ノクターン
2	Chopin, Fryderyk Franciszek. Fr. Chopin's sämmtliche Pianoforte-Werke. Leipzig: Peters, [188-?]	明治28年 4 月 1 日	337a	昭和25年 7 月19日除籍。収録作品は、ソナタ、ノクターン等でスケルツォなし。
3	Chopin, Fryderyk Franciszek. Fr. Chopin's sämmtliche Pianoforte-Werke. Leipzig: Peters, [188-?]	明治28年 4 月 1 日	337b	C21/C549-6/3T(P.Solo 85) 収録作品は、ソナタ、ノクターン等でスケルツォなし。上記 2 の副本。
4	Chopin, Fryderyk Franciszek. Walzer. N.p.; n.d.	明治28年 12月11日	698	P.Solo 252 ワルツ

表 2 の備考欄に記したとおり、所収されているのは、ノクターン、ソナタ、ワルツ等であり、いずれの資料にもスケルツォは含まれておらず、残念ながら、旧東京音楽学校の所蔵資料は手がかりとならなかった。

5 ．東京音楽学校における博士ケーベル先生

次に教育者としてのケーベル博士に目を向ける。東京音楽学校において、ケーベル博士から薫陶を受けた弟子達が、ショパンのスケルツォを演奏した記録を探ってみよう。

東京音楽学校でショパンのスケルツォが演奏されたのは大正年間に全 7 件ある。明治時代に音楽学校でスケルツォが演奏された記録は残されておらず、どれも大正時代に入ってからである。初めてスケルツォが演奏された大正 3 年以後の記録を記す。

表 3 中、第 7 番目に掲げた放送で、何番のスケルツォが演奏されたのか記載がないが、第 6 番目の演奏旅行からほど近い日に、同じ演奏者により演奏されていることを考えれば、放送されたのは、高い確率で、作品31のスケルツォ第 2 番であったと思われる。このことから、東京音楽学校による演奏は、年代順に第 4 番、第 3 番、第 1 番が各 1 回、第 2 番が 4 回であることがわかった。全 7 回の演奏で、ショパンのスケルツォは 4 曲とも演奏されているのである。しかし、このことによって、ケーベル博士が演奏したスケルツォを特定するには至らない。

表３．東京音楽学校における、ショパンのスケルツォ演奏記録

	日　時（大正）	演　奏　会　名	演　奏　者	曲　　名
1	３年10月18日	学友会恤兵演奏会[37]	川久保美須々[38]	スケルツォー 作品54
2	６年６月９日、10日	学友会春季演奏会[39]	久野ひさ[40]	諧謔曲 嬰ハ短調　作品39[41]
3	７年５月25日、26日	第34回定期演奏会[42]	神戸絢[43]	スケルツォ ロ短調　作品20
4	13年３月２日	学友会御成婚記念演奏会[44]	田中規矩士[45]	スケルツォ 変ロ短調　作品31
5	14年３月25日	卒業式[46]	福井直俊[47]	諧謔曲 変ロ短調作品31
6	14年10月17日～ 23日	関西中国地方演奏旅行[48]	山田菊江[49]	諧謔曲 変ロ短調作品31
7	14年10月31日	天長節奉祝演奏放送[50]	山田菊江	諧謔曲

しかし、各演奏者が音楽学校の演奏会で弾いた曲目から、ケーベル博士の影響を辿ることが可能ではないだろうか。特に、川久保美須々、久野ひさ、神戸絢の三名はそれぞれ直接あるいは間接にケーベル博士の薫陶を受けたと思われ、秋季音楽会でのケーベル博士の演奏を含め、師のレパートリーは、弟子達のそれに影響がなかったとは考えにくい。

まず、川久保美須々は、明治36年から大正３年まで、演奏の記録がある。在学中は、演奏会でクーラウ、モーツァルト、ベートーヴェンのソナタのみ採り上げ、卒業後教職に就いてから、ショパンを演奏している。その時の曲目が、スケルツォ作品54であった。

表４．川久保美須々の演奏記録

	日　時	作曲者名	曲　名	演奏会名	備　考
1	明治36年12月	クーラウ	ソナタ	学友会演奏会[51]	
2	明治37年12月	モツアルト	ソナタ	学友会吊祭会[52]	
3	明治39年１月 27日、28日	ベートーヴェン	ソナタ	モツアルト誕生記念 音楽会[53]	Sonata in A dur[54]
4	明治39年７月 ７日	ベートーヴェン	ソナタ	卒業式[55]	Sonata in A Major[56]
5	大正３年10月 18日	ショパン	スケルツォ 作品54	学友会恤兵演奏会[57]	

久野ひさは、卒業演奏会でベートーヴェンのコンチェルトを演奏する腕前であり、教職に就いてからも、ほかにウェーバー、バッハ＝グノー、ショパンなど、管弦楽伴奏による大規模な作品を演奏し、その技倆を披露している。ショパンの作品では、コンチェルトの他にはエチュードをレパートリーとしている。ショパンのスケルツォ作品39を演奏したのは、教授

に就任する直前の学友会の演奏会に於いてであった。この時を最後に、久野は、留学前の告別演奏会でベートーヴェンのソナタを 4 曲演奏するまで、学校の演奏会に姿を現していない。

表５．久野ひさの演奏記録

	日　時	作曲者名	曲　名	演奏会名	備　考[58]
1	明治37年３月29日	クーラウ	ソナティナ	甲種師範科卒業式[59]	
2	明治38年２月25日、26日	クレメンテ	ソナタ	学友会祝捷音楽会[60]	久野ヒサ
3	明治39年７月７日	ベートーフェン	コンセルト	卒業式[61]	Concerto in C. Major. (Cadenz by Kullak.)
4	明治40年４月27日、28日	ベートーフェン	司伴楽	第16回定期演奏会[62]	Concerto for Piano and Orchestra in C major.
5	明治40年５月15日	ベートーフェン	司伴楽	全国教育家大会参列者招待音楽会[63]	Concerto for Piano and Orchestra in C major.
6	明治43年７月25日、８月13日	不明	不明	文部省主催第２回夏期講習会開会式閉会式[64]	
7	明治44年12月９日、10日	ヴェーバー	コンサート	第25回定期演奏会[65]	Concert Piece for Pianoforte with Orchestral accompaniment
8	大正２年12月６日、７日	バハ、グーノー	メディテーション	第29回定期演奏会[66]	Meditation on a prelude for Piano, Organ and String Orchestra
9	大正３年６月14日	リスト	シムフォニックポエム「匈牙利」	学友会春季演奏会[67]	
10	大正５年５月27日、28日	ショパーン	ほ短調コンサート　作品11	第31回定期演奏会[68]	Concert for Piano with Orchestra in E Minor, Op. 11.
11	大正５年11月16日	グリーク ショッパーン	春の曲 練習曲	皇后行啓演奏会[69]	久野ひさ子 ［革命］
12	大正５年12月３日	ベートーゼン グリーヒ グリーヒ ショパン ブラームス メンデルスゾーン	アッパショナータ 春に寄す、作品43、６番 那威の嫁入行列、作品19、２番 第１大司伴楽第１楽章 ラプソディー、ト短調、作品79、２番 リード、ホ長調	久野久子女史恢復祝賀演奏会[70]	

		ショパン リスト	エチュード、ハ短調、作品10、12番 歌劇『リゴレット』の書き替へ曲		
13	大正６年６月９日、10日	ベートーゼン ショパン ショパン	嬰ハ短調奏鳴楽、作品28（ムーンライトソナータ） 練習曲、ハ長調、作品10 諧謔曲、嬰ハ短調、作品39	学友会春季演奏会[71]	
14	大正12年２月24日	ベートーヴェン	告別奏鳴曲、作品81の甲、変ホ調 ハムマークラヰ―ア奏鳴曲、作品106 奏鳴曲、作品110、変イ調 最終奏鳴曲、作品111、ハ短調	久野教授告別演奏会[72]	

神戸絢の場合はどうか。神戸は、在学中からルビンシテーイン、メンデルスゾーンを得意とし、卒業後教職に就いてから、明治36年にリスト、留学直前の39年にブラームス、留学から帰国後の43年にショパン、44年にワーグナーと、ケーベル博士との師弟関係が窺われる曲目で演奏会に臨んでいる。39年の定期演奏会におけるブラームスのラプソディーは、番号は特定できないものの、30年にケーベル博士が演奏した記録があり[73]、両者が同一曲である可能性が高い。ショパンに関しては、明治43年と大正７年の２回、計４曲が演奏されている。

なお、表５および表６において、網掛けで示した曲は、ケーベル博士による演奏記録が確認されているものである。

表６．神戸絢の演奏記録

	日　時	作曲者名	曲　名	演奏会名	備　考[74]
1	明治30年10月26日	モッツァルト	ソナタ	学友会演奏会[75]	神戸あや子
2	明治30年12月24日	メンデルスゾーン	無言歌	学友会演奏会[76]	神戸あや子
3	明治31年６月11日	メリオー	メヌエット	学友会演奏会[77]	神戸絢子
4	明治31年12月４日	ルビンスタイン	バレット	定期演奏会[78]	

5	明治32年５月７日	メンデルソーン	ヘブリーデン	同声会春季演奏会[79]	神戸あや子
6	明治32年７月８日	モツアルト メンデルゾーン	オウヴエルテユーレ ヴアリエーシヨン	卒業式[80]	
7	明治36年３月15日	リスツ	リゴレットー、ファンタジー	山勢松韻慰労音楽会[81]	
8	明治36年12月５日、６日	ベートーヴェン	ソナタ	定期演奏会[82]	
9	明治37年６月４日、５日	モツアルト	コンセルト	春季音楽演奏会[83]	
10	明治39年11月10日、11日	ブラームス	ラプソヂー	第15回定期演奏会[84]	
11	明治42年11月27日、28日	メンデルソーン シューベルト、リストジー、マチアス	カプリシオ、ブリヤン セレナーデ ラ、ヴェロシテー	第21回定期演奏会[85]	管弦楽付きピアノ ピアノ独奏 ピアノ独奏
12	明治43年７月25日、８月13日	ショパン シューベルト ショパン ショパン	アンプロチュル ロプデゾルヌ エチュード、ヘロイック バルカロール	文部省主催第２回夏期講習会開会式閉会式[86]	
13	明治44年６月29日	ワグネル	スピンネルリード	伊澤修二還暦祝賀演奏会[87]	神戸絢子
14	大正７年５月25日、26日	ショパン	ロ短調スケルツォ（作品20）	第34回定期演奏会[88]	

田中規矩士[89]、福井直俊[90]、山田菊江[91]については、年代的にみて、ケーベル博士の直接の影響があったとは考えにくく、本論ではショパンを演奏した記録を注に記すだけに留める。

６．結論

ここまで考察してきたとおり、東京藝術大学音楽学部第１回定期演奏会でケーベル博士が演奏した曲目について、「ピアノ独奏曲」「ショパン作曲」「スケルツォ」以上に詳細を記した資料は、残念ながら今のところ見つかっていない。しかし、状況証拠からとはいえ、次の推論を提示することが可能ではないだろうか。

「第１回定期演奏会でケーベル博士が演奏した
ショパンのピアノ独奏曲スケルツォは、
第１番ロ短調作品20である。」

その根拠を以下に記す。

⑴　曲想

第１番ロ短調スケルツォは、1830年のクリスマスイヴに、ショパンがウィーンの聖シュテファン教会に立ち寄った際に着想を得て、31年から32年にかけてパリで作曲された。スラブ人の熱い血が燃えたぎるような印象を与える曲である。

楽石生による讀賣新聞の演奏会評にある「情熱に富みし」という言葉に注目すれば、ショパンの４曲あるスケルツォの中で、第１番が曲調に一番合致する。

さらに、 *The Japan Weekly Mail* (Dec. 24, 1898) の評にある "...sombre rhapsodical Chopin..." の表現も、第１番に与しよう。

また、中間部では、静かな佇まいの中に物憂くも情熱的な旋律がロ長調で奏でられる。これはポーランドの古いクリスマス・キャロル「眠れ、幼な子イエス」からの引用と言われる旋律である。

秋季音楽会および横浜での演奏会の時期が12月のクリスマスシーズンでもあり、クリスマスの歌からの引用が含まれる曲は、演奏会のプログラムとしてまさにふさわしかったと思われる。

⑵　神戸絢

愛弟子である神戸絢が、大正時代になってからとはいえ、定期演奏会で、第１番のスケルツォを演奏していることは、ケーベル博士の演奏曲目を推定するにあたり、大きな判断材料となる。

先にも記したとおり、明治31年12月４日の第１回定期演奏会で、当時３年生だった神戸は、連弾でルビンシテーインの〈オペラ「フェラモルス」からのバレット〉を演奏した。同年５月から嘱託講師として音楽学校に出向し、ピアノと音楽史を教え始めたケーベル博士は、神戸にとって当然のことながら畏敬すべき先達であったはずである。第１回となる記念の音楽会の同じ舞台で、師であるケーベル博士の演奏するスケルツォを聴いたことになるのである。恩師の情熱に富む演奏は、若い弟子の心に深く刻まれたことであろう。

神戸は、翌32年卒業と同時にピアノ授業嘱託となり、39年、文部省よりパリ音楽院に聴講生として派遣され研鑽を積んで42年帰国、東京音楽学校教授として後進の指導にあたり、長くフランス音楽の紹介者として高く評価された。神戸は、留学時の新聞記事[92]に、その演奏を評して、「ピアノ家としての女史は其の師ケーベル氏其儘の妙手にて」と紹介されるほど、ケー

ベル博士の影響を強く受けている。

ふた昔前、向学心に燃える若き学生の時、熱い思いを胸に聴いたであろう恩師であるケーベル先生の奏したショパンを、母校の定期演奏会という晴れ舞台で、さらに自身の集大成として世に問うた気持ちは充分理解できる。この時を最後に、神戸は二度と音楽学校の演奏会にピアニストとして姿を現すことはなかったのである。

むすび

以上の特定作業により、ケーベル博士が第１回定期演奏会で演奏したピアノ独奏曲は、ショパンのスケルツォ第１番ロ短調作品20であるとの結論に導くことができた。本年は東京藝術大学創立120周年記念の年にあたり、全学を挙げて、多くの記念行事が開催されている。その掉尾を飾り、2008年２月20日と21日には、「東京音楽学校第１回定期演奏会」再現コンサートが行われ、ケーベル博士が明治31年に演奏したショパンのスケルツォも再現される予定である。

注

1　明治31年12月４日（日曜日）、午後１時半開会。

2　東京音楽学校は、明治26年６月より高等師範学校附属音楽学校に組み込まれた。32年４月再独立。

3　『讀賣新聞』明治31年12月11日第３面に、当日の様子が記されている。「十二月四日、音樂學校ハ秋季演奏會を開きたり。散り布きたるもみぢ葉に時雨さへして初冬の景色寂びしき今日此頃にハめづらしき好天氣にて、招待うけし士女もるゝ数なく集ひ來つ。午後一時半開會と云ふに、はや午の刻過ぎに大講堂のおほかたハ満ち満ちたり演奏ハ定めの時刻より少こしおくれて始まりぬ。」（ふりがな略、一部著者により表記を変更した箇所あり。以下同様）

4　「去年の音樂界」、『天地人』第13号、明治32年１月、32頁。「（前略）音樂界に於て總て音樂の進歩と普及を希望する者を満足せしめたるは傍聽人の多數にして殆んど立錐の隙なく、遅参者を謝絶せざるを得ざる程なりき。是音樂嗜好者の數が日に月に増加しつゝある慶徴なるのみならず、音樂學校の教授及び生徒の為めに、實に無上の奬勵なるべし。（後略）」

5　『東京芸術大学百年史　演奏会篇』第１巻、音楽之友社、1990年、643～653頁の「補遺Ⅱ　明治・大正期の東京音楽学校演奏会一覧」によれば、東京音楽学校では、明治21年から、卒業式、同好会・同声会・学友会、その他の機会に演奏会が行われているが、定期演奏会としては、これが第１回となる。なお、以下の注において、本図書を『演奏会篇』と略記する。

6　『高等師範学校附属音楽学校一覧』従明治31年至明治32年、第２章「沿革略」、19頁。

7　明治31年４月４日、教授上原六四郎に替わり主事を任ぜれらた谷田部良吉が、同年６月20日高等師範学校長になったため、教授渡邊龍聖が主事となった。

8　「音樂界」、『帝國文學』第５巻第１号、明治32年１月、128～130頁。『演奏会篇』、76頁に一部記載。

9　本論執筆の平成19年８月末時点で、東京藝術大学音楽学部の定期演奏会の開催回数は、以下のとおりである。オーケストラ324回、オペラ52回、吹奏楽72回、室内楽33回、邦楽74回、チェンバーオーケストラ９回。

10　本学所蔵のプログラムより転記する。旧字の表記は、新字に変更した。プログラムは、１枚の裏表に、和文は縦書き、欧文は横書きで記されている。英語のタイトル・ページは、以下のとおりである。Concert/ON SUNDAY, DECEMBER 4TH, 1898, /IN THE/CONCERT HALL/OF/THE ACADEMY OF MUSIC, /UYENO PARK, /TO BEGIN AT 1.30 P. M. 『演奏会篇』、75～76頁にも掲載。

11　『讀賣新聞』明治31年12月11日第３面および12月12日第２面。

12　楽石生「音樂學校秋季演奏會（承前）」、『讀賣新聞』明治31年12月12日、第２面。記事中の傍点は省略した。以下同様。

13　楽石生「音樂學校秋季演奏會」、『讀賣新聞』明治31年12月11日、第３面。

14　N. P.「去年の音楽界」、『天地人』第13号、明治32年１月、32～36頁。

15　塩入亀輔、唐端勝共編『音楽大辞典』新興楽譜出版社、1952年、171頁。

16　コンツキは、ポーランドの音楽一家で、ここに記されているのは、ピアニストであり作曲もしたAntoni Katski (1817-1899) である。繊細なタッチと超絶技巧が高く評価され、サロン風の小品を多数作曲した。最晩年の1896～98年、極東およびシベリア経由、ワルシャワへの演奏旅行を行い、日本にも立ち寄った。神戸、横浜、東京で演奏会を行っている。

17　目次のタイトルは、「音楽家コンツキ氏」である。

18　『文學界』第31号、明治28年７月30日、30頁。

19　『東京日日新聞』明治28年６月23日。

20　*The Japan Weekly Mail*. Dec. 24, 1898, p. 636.

21　ケーベル博士のレパートリーについては、次の拙論を参照。「ラファエル・ケーベルの日本における演奏活動について」、『音楽の宇宙――皆川達夫先生古希記念論文集』音楽之友社、1998年、295～303頁。また、演奏記録を含めた年譜は、以下を参照。角倉一朗、関根和江「ケーベル先生年譜」、『東京藝術大学音楽学部紀要』第23集、平成10年、49～56頁。

22　ケーベル博士は、大学教師 (哲学) となるべく、恩師ハルトマンを頼ってベルリンに赴いた。この時、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ作品90も演奏。

23　メンデルスゾーン：無言歌、ウェーバー：無窮動も演奏。

24　グリーク：ヴァイオリン・ソナタヘ長調（ユンケルと共演)、ブラームス：ピアノ・トリオハ短

調（ユンケル、シュミットと共演）も演奏。声楽、ヴァイオリンの伴奏も担当した。

25　スカルラッティ＝タウジヒ：パストラーレとスケルツォも演奏。

26　デュランテ：ソナタ、ヘンゼルト：小さなワルツ、バラキレフ：東洋の歌Orientalische Lied、スカルラッティ：パストラーレとスケルツォ、チャイコフスキー：ポルカも演奏。カイゼルKayserの独唱（ウェーバー：魔弾の射手よりアリア、ビゼー：カルメンよりアリア、ルビンシテーイン：露は輝くEs blinckt der Tau、シューマン：月の夜Mondnacht、ブラームス：甲斐なきセレナードVergebliches Ständchenを伴奏。

27　サン・サーンス：ベートーヴェンの主題による変奏曲（幸田延と連弾）、ルビンシテーイン：カプリースも演奏。

28　ケーベル、ラファエル・フォン『ケーベル博士小品集』深田康算、久保勉共訳、東京：岩波書店、大正 8 年、291～294頁。

29　『讀賣新聞』明治31年12月12日第 2 面。

30　橘糸重（たちばないとえ）明治 6（1873）～昭和14（1939）。明治25年東京音楽学校卒業後、同校教師となりピアノを教えた。ケーベル博士が来日後初めて公の場で演奏した慈善音楽会(明治27年 5 月 5 日)に橘糸重も出演している。ドイツ語を得意としたこともあり、ケーベル博士に親しく接し、教えを乞うた。歌人としても知られる。

31　久保勉（くぼまさる）明治16（1883）～昭和47（1972）。ドイツ哲学者。明治45年東京帝国大学卒業。博士ケーベルの最良の家人であり、心の友であり、最も忠実な弟子と評された。『ケーベル博士小品集』(深田康算、久保勉共訳、岩波書店、大正 8 年)、『ケーベル博士続小品集』(久保勉訳、岩波書店、大正12年)、『ケーベル博士続々小品集』(久保勉訳編、岩波書店、大正13年)により、師の思想を広く世に知らしめたばかりでなく、『ケーベル先生とともに』(岩波書店、昭和26年）を著すことにより、「人間ケーベル」を描写した。

32　小宮豊隆（こみやとよたか）明治17（1884）～昭和41（1966）。ドイツ文学者、文芸評論家。明治41年東京帝国大学独文科卒業。夏目漱石門下で、生涯漱石を敬愛し、漱石没後、『漱石全集』の編集に専念した。長く東北大学教授を務め、昭和21年からは、24年に東京音楽学校が東京藝術大学音楽学部となるまで最後の校長として責務を果たした。なお、小宮がドイツ留学中パリで購入したエラールのピアノが、平成18年、遺族の意志により東京藝術大学に寄贈されている。

33　ケーベル文庫については、東北大学附属図書館のホームページ http://www.library.tohoku.ac.jp/collect/collect.html を参照。

34　橘糸重「ケーベル先生の思ひ出」、『思想』第 3 巻 4 号、大正13年 4 月、51～54頁。

35　ピアノ曲以外では、以下の楽譜と洋書がショパンの資料である。参考までに記しておく。(登録番号順)

1．*Harmonium-Album*. Edited by J. Löw. N.p.: n.d.　明治28年 4 月 1 日登録、no. 433。

2．*Valses pour Violon et Piano*. Trans. par A. Sahulz. N.p.: n.d.　明治28年 4 月 1 日登録、no.

614。

3．*Sonate für Pfte. u. Violine. Op. 65*. Bearbeitung von F. David. N.p.: n.d.　明治30年１月28日登録、no. 891 1/2。

4．*Sonate für Pfte. u. Violine. Op. 65*. Bearbeitung von F. David. N.p.: n.d.　明治30年１月28日登録、no. 891 2/2。

5．*Letters*. Collected by Henryk Opienski, translated from the original Polish and French by E. L. Voynich. New York: Knopf, 1931.　昭和７年12月10日登録、no. 1031。

6．*Clavier Conzert. Op. 11*. N.p.: n.d.　明治38年10月２日登録、no. 1731。

7．*Clavier Conzert. Op. 21*. N.p.: n.d.　明治38年10月２日登録、no. 1732。

8．*Harmonium-Album*. Edited by J. Löw. N.p.: n.d.　明治39年９月15日登録、no. 1878。

9．*Funeralmarsch*. N.p.: n.d.　明治39年２月24日登録、no. 1894。

36　ピアノ曲の楽譜中、２と３は、同じピアノ曲集の正本・副本であり、２は昭和25年に除籍されているが、ケーベル博士の在職時には２冊所蔵されていたので、本論文では、資料数を４点とした。

37　『演奏会篇』、396頁。

38　明治42年研究科修了。明治45年教務嘱託、大正２年助教授、大正５年退職。演奏会の時、助教授。

39　『演奏会篇』、457頁。

40　明治40年研究科修了。明治43年助教授、大正6年8月から教授。大正12年ドイツ留学。演奏会の時、助教授。

41　『演奏会篇』のプログラムには、作品37とあるが、正しくは作品39である。

42　『演奏会篇』、472頁。

43　明治29年東京音楽学校専修部入学、32年卒業しピアノ授業嘱託となる。35年助教授、39年パリ音楽院派遣、42年帰国、教授となり昭和８年まで在職。演奏会の時、教授。

44　『演奏会篇』、568頁。

45　大正10年研究科修了。12年教務嘱託。演奏会の時、教務嘱託。

46　『演奏会篇』、593頁。

47　大正14年本科器楽部卒。

48　『演奏会篇』、604頁。

49　大正13年３月本科器楽部卒、４月研究科入学。演奏会の時、研究科２年生。

50　『演奏会篇』、604頁。

51　『演奏会篇』、142頁。

52　『演奏会篇』、159頁。

53　『演奏会篇』、199頁。

54　プログラムの欧文表記。

55　『演奏会篇』、206頁。

56　プログラムの欧文表記。

57　『演奏会篇』、396頁。注37と同一。

58　プログラムの別表記、欧文表記など。

59　『演奏会篇』、144頁。

60　『演奏会篇』、161頁。幸田教授に師事と記載されている。

61　『演奏会篇』、207頁。

62　『演奏会篇』、219頁。

63　『演奏会篇』、224頁。

64　『演奏会篇』、301、302頁。

65　『演奏会篇』、333頁。

66　『演奏会篇』、380頁。

67　『演奏会篇』、390頁。

68　『演奏会篇』、431頁。

69　『演奏会篇』、441頁。

70　『演奏会篇』、446頁。

71　『演奏会篇』、457頁。注39と同一。

72　『演奏会篇』、554頁。

73　明治30年 5 月29日、奏楽堂における慈善音楽会。

74　プログラムの追加情報および別表記。

75　『演奏会篇』、52頁。高木ちか子と連弾。

76　『演奏会篇』、59頁。

77　『演奏会篇』、70頁。瀧廉太郎、栗本清夫、田中ヤソ子と連弾。

78　『演奏会篇』、75頁。内田菊と連弾。この時 3 年生。

79　『演奏会篇』、81頁。遠山甲子子、橘絲重子、山縣きく子と連弾。この時、ケーベル博士は、同じ舞台で、ユンケルのヴァイオリンを伴奏し、ベリオBeriotの「コンサルト　ミリテールConcert Militäre」を演奏。

80　『演奏会篇』、83頁。卒業生神戸絢、助教授橘絲重、研究生瀧廉太郎、研究生前田久八と連弾。

81　『演奏会篇』、129頁。三浦俊三郎『本邦洋樂変遷史』、日東書院、1931年、435頁によれば、「ピアノ独奏、多少の間違ひは有つたにせよ、この大曲を女の身でとは、只管感服の外がない。音樂學校女教師中では例のない上出来である」。この時、ケーベル博士も出演し、ユンケルとルービンスタイン：ソナターを演奏。前掲書435頁によれば、「ピアノ、ヴァイオリン合奏は非難の点を求むるに苦しむ。」とある。

82　『演奏会篇』、138～139頁。この時、助教授。

83　『演奏会篇』、146頁。この時、助教授。秋山龍英『日本の洋楽百年史』、第一法規出版、1966年、

131頁によれば、「神戸助教授のピアノ独奏独特の妙技聴者には大物過ぎて高襟連すら只うまいと評する外なし」。

84 『演奏会篇』、210頁。この時、助教授。『音樂新報』第３巻第11号、明治39年12月、28～30頁によれば、「神戸夫人のピヤノ　先づブラアムスを弾ぜられたるは何より嬉し、特に近代樂の特徴とも云ふべきラプソデイを弾ぜられたるは猶嬉し、曲も決して易々たるものにあらず、ひきぶりもいとめでたく、語るが如きメロデイも確に受取られたり、近来同樂堂の才媛、特に教授諸氏の独弾あまり無き時に於て夫人の此の勤勉あるは感謝に堪えざる處なり」。

85 『演奏会篇』、281頁。この時、教授。

86 『演奏会篇』、302頁。この時、教授。開会式曲目は、ピアノ独奏、ショパン：アンプロチュ、シューベルト：ル　ロプ　デ　ゾルヌ。閉会式曲目は、ピアノ独奏、ショパン：エチュード、ヘロイック、ショパン：バルカロール。

87 『演奏会篇』、327頁。ピアノ独奏。

88 『演奏会篇』、472～477頁。一記者による新聞記事（「上野の演奏會」、『都新聞』大正７年５月28日）によれば、「ピアノの神戸絢子女史には少からぬ期待を持つて居たが、奏し始められると同時に私は多くの裏切られた心地がした、氏の沈着な弾奏振に引換へ、座に響く音の中には、何故か濁りが見えたを遺憾とする。」と酷評されている。

89 大正13年３月２日、学友会御成婚記念演奏会で、ショパンの「スケルツオ変ロ短調」を独奏。

90 大正14年３月25日、卒業式で、本科器楽部卒業生として「変ロ短調諧謔曲（作品31）」を独奏。大正15年６月26、27日、学友会春季演奏会で、「ポロネイズ、嬰ヘ短調（作品44）」を、大正15年10月13日、学務部長招待音楽会で、「波蘭舞踏曲（嬰ヘ短調）」を、大正15年11月10～15日、演奏旅行で、「波蘭舞踏曲（嬰ヘ短）」を独奏。

91 大正13年６月27、28日、学友会春季演奏会で、「ハ短調ロンド作品１」を、大正13年11月22日と大正14年５月３日、演奏旅行で、「軍隊的波蘭舞踏曲（作品40、第１番）」を、大正14年10月31日、天長節奉祝演奏放送で、「諧謔曲」を、大正15年３月25日、卒業式で、研究科器楽部修了生として「ヘ短調幻想曲（作品49）」を独奏。

92 『東京日日新聞』明治39年12月13日第２面。

Dr. Koeber and Chopin:
At the First Regular Concert of Tokyo School of Music

SEKINE Kazue

In 1893 Dr. Raphael von Koeber, a philosopher as well as a musician, was invited to Tokyo University as a teacher of Western philosophy. From 1898 until 1909, he also taught piano playing and music history at Tokyo School of Music, today the Music Department of the Tokyo National University of Fine Arts and Music.

In December 1898, Meiji 31, the first regular concert of Tokyo School of Music was held at *Sogakudo*, the concert hall of the school. It was said that Dr. Koeber played a solo piano piece, but the program of that concert does not tell us who the composer of the piece was nor even what its title was.

A thorough investigation was made into (1) Dr. Koeber's repertory, (2) repertories of three pupils of Dr. Koeber, Kawakubo Misuzu, Kuno Hisa and Kambe Aya, (3) informations from periodicals, newspapers and concert programs of those days. As a result we have come with considerable justice to a conclusion as follows: it was Chopin's Scherzo no. 1, b minor, op. 20 that Dr. Koeber played at the first regular concert of Tokyo School of Music.